

老 舍『二 馬』試 論

渡 辺 武 秀

On Lao Shê (老舍)'s "Êrh Ma (二馬)"

Takehide WATANABE

概 論

《二馬》里老舍写了‘人类成见’的问题。这个问题特别难以解决。在这个作品里老舍首先提出在英
国如何发生‘人类成见’，然后幽默地写到英国人怎样相信‘人类成见’，以及中国人在英国人的‘人
类成见’之下怎样过日子等等。老舍暗示说，这个问题本身并不那么复杂，只不过是天真地相信‘成见’
的英国人以及被‘成见’对待而误解英国人的中国人，在‘成见’的背后把它搞得乱七八糟，使问题复
杂化了。难以解决‘成见’的原因不是其内容的，而是人的。他们（有的中国人也包括之内）都不知道
‘成见’是好还是坏，却都自然地接受了‘成见’，并且都没想到对方精神上可能受到创伤。

序

この作品は『小説月報』第二〇巻5号（1929年）から12号に連載されたものである^(註1)。老舍は一九二四年夏にロンドン大学の東方学院の中国語教師としてロンドンに行き、その地で『老張の哲学』『趙子曰』をものにしている。この作品は、それらに続く第三作めとなる。

前回、筆者は「老舍『趙子曰』試論」^(註2)という小論で、「『趙子曰』という作品は、自分の確固とした考えを持たず、無意識のうちに、情報で踊る人々の諷刺を目的にしたものであると考えられる」^(註3)というふうに捉えた。

この時、「老舍の『ユーモア』」は、決して作品主張の妨げになるものでなく、諷刺の過程で、登場人物の「無意識」或は「踊る」という微妙な部分を描き出す際に極めて有効であると考えられる。

作者の老舍が、このような微妙なところを描き出そうとしていたことは、後の、彼が「ユーモア」について語る文章の中に見いだすことができる。その最も象徴的なものが「ユーモアには同情がある」という。良い人にも悪いところがある

あり、悪い人にも良いところがある。」^(註4)という文章であり、「ユーモアを持つ人は、……(略)……自分を宝もののように見る。彼はいろんな事の中から笑うべき点を見い出せ、技巧的に描き出す。人間の欠点を見出し、人に見せる。ただ見せるばかりでなく、自分もまた人類の欠点を認める。つまり、人々には笑うべきところがあり、自分もその例外ではない。……(略)……笑いには同情を帯び、ユーモアは深奥に通じる」^(註5)という文章ではないか。

つまり、老舍が作品で描き出そうとしているのは、言ってみれば、登場人物を描く際に「悪人」を悪人に描かず、「善人」を善人に描かないことで獲得することのできる部分、さらには「人間を宝もののように見る」「人間だれしも同じなんだ」といった人間理解から出て来るものである。勿論、これは老舍の創作法であり、そこから滲み出るのは、彼の思想、哲学である。

この創作方法、その効果は、「ユーモア」作品と称せられる『老張の哲学』『趙子曰』に、はっきり見て取れる^(註6)。しかし、もし「ユーモア」を老舍のすでに確立されている創作方法とすれば、老舍のその方法の基本線が、ひき続き、なお、この『二馬』にも存在しておかしくない。そして、この視点の方向から『二馬』を

平成2年10月15日受理

* 一般教育部講師

見れば、老舎がこの作品でやろうとした試みが、更によく解るのではないか。

今回、この小論で、『趙子曰』に続き、『二馬』という作品を取り上げ、前述のような視点から、さらに老舎文学の本質みたいなものを考えてみたい。

『二馬』は馬という姓の親子が主人公であり、彼らのロンドンでの生活を描いたものである。

作品は五段に構成され、第一段は馬威が失意の様子で公園に行んでいる場面から始まる。この場面の後、第二段の舞台は一転して一年前に遡る。

その第二段は馬親子がロンドンに着きウエンドル未亡人の家が宿と決まった春。第三段が夏。第四段がクリスマスを中心とする冬。第五段が春。ロンドンのそれぞれの季節を巡って、ストーリーは展開。最後に冒頭の場面に戻る。

この構成であるから、ストーリーの事実上の始まりは第二段からであるが、この第二段の冒頭で、英国で普通に行われている英国人の中国人理解、つまり「中国人に対する偏見」がどのようなメカニズムで作りに上げられたものかが紹介されている。まず、ここに注目してみたい。

東方に旅行する金の無いドイツ人、フランス人、アメリカ人はロンドンに来た時、必ず中国人街を見に来る。中国人街は何ら変わったことも無いし、住んでいる労働者にも、おかしい挙動があるわけではない。つまり、そこに中国人が住んでいるということで、ちょっと見てみようとするのだ。……(略)……中国人街に二十人住んでいたら、必ず五千人とし、しかも、五千人の黄色い顔をした奴らはアヘンを吸い、武器弾薬を密輸し、人を殺して生首をベッドの下に隠し、老若を問わず婦女を強姦し、一切の、少なくとも極悪非道のことをする連中だ、としてしまう。小説を書き、戯曲を作り、映画を制作する人たちは、中国人を描くのに、この種の伝説と報告を根拠にする。そこで劇や映画を見たり、小説を読んだりする人たちは、娘さん、おばあさん、子供から英国皇帝に至るまで、この道理を逸した仕

業をしっかりと記憶する。ここにおいて、中国人は世界でも最も陰険で、最も汚く、最も厭らしく、最も野卑な、二本足をした動物に変わる^(註7)。

真実と、伝えられる情報の間に小説家、戯曲作家、映画作家らがおり、それらの人々が真実を歪めた形で読者、観客に流す。読者、観客はその情報をそのまま真実として信じ込む。信じ込むばかりか、その伝えられた情報によって読者、観客は踊り始める。やがて、その情報はあたかも真実のような顔をして一人歩きを始める。このような情報伝達のメカニズムがまず紹介される。

実は、この「人種偏見」成立のメカニズムの在り方が、登場人物の造形に大きな意味をもつ。

この点を作品の重要な登場人物であるウエンドル婦人の娘、メアリーの場で具体的に見る。

メアリーの中国人理解は次のように読者に知らされる。ウエンドル婦人が朝食のとき、馬親子から貰った中国茶を入れ、飲もうとする場面である。

ウエンドル婦人はパンを一口食べ、たった今入れたお茶の碗を持った。娘のメアリーは慌てて婦人の腕を引き、「毒が入っているわ!」この言葉を懇ろに言った。勿論、馬威がそこにいないかのようになり、まるで中国人が毒薬を使って人を殺すのは間違いのないことで、一点の曖昧さもないことのようにだった。彼女の唇は自然に震え始めているのが、はっきり分かった^(註8)。

この種の発言は、メアリーの口から再三発せられる。馬威は好意から中国から持ってきたお茶をあげた。そのお茶に「毒が入っている」と言われたのだから、馬威は確かに傷つく。だが、作者は前文に続けて以下のように書く。

彼女は決して馬威を傷つけようというのではなく、また特に細かに気を配るというのでもなかった。彼女の言葉は純粹に「当然そうなのだ」として発せられたものなのだ、人を傷つける気持ちは無く、彼女は何が人を傷つけるのかも分からなかった。劇中に中国人がいさえすれば、彼は必ず毒薬を使い人を殺す。映画、小説も総てこんなふうである。ミス・ウエンドルのこの警告は歴史を持つもの

であり、些か宗教的信仰に近いものを含む。回族が豚を食べないことは、誰でも知っている。中国人が毒薬で人を殺すことは——一種の宗教的信仰である^(註9)。

メアリーにすれば、メアリーの頭に「中国人がお茶に毒が入れる」のは宗教的レベルで「当然そうなのだ」として入っており、「お茶に毒が入っている」の発言で、馬威が「傷つく」など思いもよらないことなのである。

メアリーの「当然そうなのだ」と無邪気に信じ切っている姿は、すでに充分ユーモラスである。そこには、無批判に情報を聞き、その情報を鵜呑みにし、その情報に踊らされている滑稽さがある。そして、その姿が極めて滑稽であるが故に、これだけで充分、登場人物に憎めなさ、罪の無さが醸し出されるように思える。

にもかかわらず、作者はさらに「決して悪意はないのだ」という、言わば但し書きのようなものまで加えている。

次の文章で、この傾向は、更に明らかである。

「お母さん、彼らをかばうことないわ。もし彼らが人に嫌われないのであれば、どうして映画、劇、小説の中での中国人はいつも人を殺したり女性を襲ったりするのかしら？」（メアリーの経済と倫理の関係は新聞紙上から見いだしたものであり、彼女の中国人嫌いは総て新聞紙上、映画から得たものである。その実、彼女の経済や中国人に対する知識は、彼女自身が模索して得たものではなかった。だが彼女を責めることは出来ない。もし中国が混乱していなかったら、外国の新聞もどこからこんなひどいニュースをもっては来れまい。）^(註10)

これらの但し書きがあることによって、このような発言をするのはメアリーが悪いのではなくて、メアリーをこのように発言させる新聞、映画が悪いのだ、メアリーには決して罪はない、となるのではないか。つまり、この但し書きで、メアリーを故意に「かばっている」のであり、言わば、メアリーを悪人に捉えさせないという作者の意志の表れである。だから、このような鮮明な意志の現れに注目することによって、作者が作品主題をどのような形で表そうとしているか、登場人物或は人間をどのように捉えさせよ

うとしているかまで理解できるのではないか。

当然ながら、中国語で書かれたこの作号の読者は、中国人を想定して書かれたものである。こう考えた時、この作品に於けるメアリーの発言は、少なくともこの作号の読者であると想像される中国人にとっては、かなり強烈な衝撃を与える。その結果、読者がメアリーに激怒してしまう恐れがある。その衝撃たるや、もはやメアリーを描く際のユーモラスな表現で笑わせることにより押さえられるものではない。このことを作者は知っている。激怒を招けば、読者はメアリーを憎み、彼女一人に非難の矛先が向けられてしまう。そうなれば、メアリーだけを退治すれば、それですべて問題が解決されるかの印象が生まれ、作品で提示されている問題は個人的、個別的な意味合いに流れてしまう。そうではなく、作者は読者に一時的な激怒に左右されることなく冷静にメアリーの発言の背後にあるものを考えさせたいのである。

メアリーのような発言をする人物が出現するには、そのような人物を生み出す素地がある。つまり、メアリーの発言、「偏見」の問題は、一人の英国人の問題ではなく、ましてメアリーを血祭りにあげれば事は解決するものでもなく、これは英国社会の問題であり、ひいてはその根源には中国社会、中国人自身の責任もある。このように問題をとらえるように描いている。

また、次のような点も浮かび上がってくる。

彼女の発言の根底には悪意はない。基本的には普通の人である。だが、無邪気に、無批判に「中国人は極悪非道の者たちである」ということを信じ、そのまま発言することによって、彼女を最も理解しようとしている人を平気に傷つけてしまうという事実が明らかにされている。つまり、客観的に見れば、メアリーは加害者であり、同時に被害者でもある。だが彼女自身は加害者とも、被害者とも思っていない。だから始末に困るのである。これが「偏見」に縛られている人々の正体である。

作者が作品でユーモラスに語るように、もし

かしたら人種に対する偏見は、たいした理由、根拠があるのではなく、あるいは単に経済的・軍事的に弱い立場にあった人々を笑いのものにするためのものであったかもしれない。だが一旦出来上がってしまうと、送られた情報を鵜呑みにする多くのメアリーのような人物がいて問題をさらに複雑にし、それを消し去るのは絶望的なほど難しいものにしてしまっているのではないか。このように「偏見」の解決の難しさを捉え、それに縛られている愚かさを風刺しているのである。

二

次の場面は、英国人の中国人に対する偏見の不当さという方向、つまり中国人側に立ち、読み進めている者に強烈な衝撃をあたえる。印象が余りに強烈で、ややもするとこの場面は作品のテーマから異質のように感じるが、メアリーの描き方を押さえておけば、この場面での諷刺の方向が容易に理解できる^(註11)。

キャサリンという女性が馬威に誘われて『状元楼』という中国料理屋に食事をしに来る。そこに中国人の茅、曹という学生がいる。

キャサリンは馬威が姉と慕っている女性で、彼女は中国語を学び、中国、中国人を正しく理解しようとし、時には馬威の将来を考えアドバイスもするような人物である。

このキャサリンと馬威が食事を始めようとしたとき、突然、茅という人物があたかも曹に話すかのような態度で、英語で発言をする。

「外国の娼婦はもっぱら人と寝るのを生業とする。金のある奴は彼女たちのところに行って寝りゃいいんだ。喫茶店とか料理屋は娼婦と会う場所とは違うぜ！ いいかい、曹くん、ぼくは女を買うことには反対しない。ぼくもそうとう遊んだ。ただぼくが一番嫌いなのは尻の青い坊ちゃんが娼婦を連れあちこちに得意そうに出入りすることさ。娼婦に中国料理を食べさせるなんて！ フン！」^(註12)

曹という人物が中国語で「どうしたんだい？ 外国の婦人たちはみんな娼婦ではないだろう」

という間に、茅が英語で答えて言う。

「ぼくの知っている女性はみんな娼婦さ。でもぼくは人が娼婦を公衆の面前に連れだしひけらかしているのを見たいとは思わないね！」彼はまた馬威をちらっと見た。「みてくれがしのことなんかよせばいいのに！ 君が彼女に飯をおごるぐらいのお金は払えるって、いかにも君が金を持っていることがわかる！ ぼくの場合は、金を払って彼女たちと一晩寝ることが大事なんだ！」^(註13)

この発言にキャサリンは顔を真っ赤にし、ついには中華料理屋から出て行くことになるのだが、この発言の背後には皮肉なことに中国人が英国で受けている差別がある。

この作品で「中国人と娼婦との関係」がいくつか述べられている^(註14)。

ロンドンについたばかりの馬威に李子栄がロンドンの状況を説明する下りに、女性に触れ「ここ、ロンドンでは、娼婦の外は中国人を人並みに見てはくれない」^(註15)と話す。

また、次のような文章もある。

人々はみな中国人を馬鹿にしているのではなかったか、娼婦も例外ではない。娼婦にも彼女たちなりの自由と誇りがある。誰が人を歯牙にもかけない中国人に声をかけたりするものか！^(註16)

問題の場面には上述のような背景が伏線としてある。「娼婦」というまでもなく英国社会の最下層の人々である。金を払うことで、その人々だけが中国人と付き合ってくれる。いや、彼女たちさえも中国人を無視する。作者はこれが英国における中国人の地位であると描く。

したがって、茅という人間は、『英国の女性で、中国人と付き合ってくれるのは娼婦ぐらいのものである』という体験をし、『中国人と付き合う女性は娼婦である』という結論を導き出している。しかも、これが真実であり一点の否もないと考えているのである。

じつは基本的には茅の描き方もメアリーの場合と一致する。茅も被害者であり、当時に加害者である。だが彼自身は被害者とも、加害者とも思っていない。少なくとも、このように描いてあると取るべきである。

茅の頭にはすでに『中国人と付き合う女性は娼婦である』という考えが揺るぎない真実として入っており、『中国人と付き合う女性が娼婦でない』ことが信じられないのである。だから彼は真実をそのまま言ったのであり、まさかキャサリンを傷つけるなどとは夢にも思わないのである。ただ、キャサリンのように中国、中国人を理解している『普通の』女性がいることが理解できないのである。この人物を見る場合、まず、ここで押さえておく必要がある。

確かに茅の言葉には悪意がある。だがその悪意は馬威に向けられたもので、キャサリンにではない。彼は、金を払って娼婦と遊ぶのだけでも大変なのに、金持ちの坊ちゃんが中華料理屋に英国の娼婦を連れてき、俺は金を持っているのだという顔をしていることに腹を立てているのである。決してキャサリンを侮辱しようとしているのではない。こう考える方が作者の意図に近いのではないか。

ではなぜ茅は中国語でなく英語で馬威を批判したのか。

これは茅の発言内容の勇ましさと裏腹に、彼の卑怯で臆病な個人的性格を表している。中国人の悪口を言うときには英語で言い、正面对決を避けているだけである。もちろん英国人の悪口を言うときは中国語を使うはずである。その英語を使ったということがまた皮肉なことに、キャサリンには面と向かった侮辱になるのである。この場面には、問題の深刻さと裏腹に、微妙に総てがすれちがっている事から来る『笑い』がある。一つの悪い事態が皮肉にも次々に悪い方向に転げて行く、こういう運命の不可解さ、とも言えるだろうか。

『茅はキャサリンを侮辱しようとしているのではない。だが、キャサリンはひどく傷ついた』のだとすれば、そこには、なんと、好意的に中国、中国人を理解しようとしている人物を、皮肉にもその中国人が傷つけてしまう、という悲劇的な構図が描き出されている。差別される側から言えば、差別されることで差別される側も

無意識に差別の壁を作ってしまった。その結果、その壁で差別しない人までよせつけないという事になる。しかも茅が留学生ということで、英国、英国人を最も理解し、将来は英国と中国の橋渡しをしなければならないはずの人物が、実は英国人を誤って理解していることで、逆に普通の中国人と英国人との相互理解の前に立ちほだかることがあることを暴露している。これは、差別される側の「偏見」である。

三

極端ではあるが、メアリーの場合にしろ、茅の場合にしろ、それぞれが送られた情報が絶対に正しいと信じ、しかも自分が正しく一点の否もないと思っているのであれば、永久に英国人が中国人を、中国人が英国人を、互いを理解することはない。

だが本当にこの病的な閉塞した状況を打開する方法はないのか。この模索がこの作品でなされているのか。この節ではこれを探ってみる。

馬威はメアリー嬢を一目で好きになる。まず、その時の馬威の心理に注目したい。

会うなり彼の心は驚きから羨みへ、やがて好意へ、そして夢中になってた。まるで初めて酒を飲んだ人が、だたの一杯で、顔がアッと言う間に真っ赤になるのと同じような速さで。だが彼女の様子、言葉は……彼の心をかなり冷静にさせた。……でも彼女が「さようなら」って言ったとき、確かに笑っており、視線は彼のほうに飛んで来ていたではないか。……或はもしかしたら彼女は彼を嫌っているのではないかもしれない。……そうだ、ただ中国人を嫌っているだけなんだ！ ヨーシ今に見ていろ、そのうち彼女に中国人がどんなものかみせてやる。……でも何もよりによって彼女なんかと交際しなくとも。女性が多いのに。……(註17)

メアリーは送られて来た情報によって、中国人を「極悪非道の者たち」と思っている人物であることは既に述べた。この人物を馬威は好きになったのである。好きになった余り、馬威はメアリーを「自分を嫌っているとかぎらない」と

する。つまり、彼女が嫌っているのは(小説、映画、戯曲等からできあがった)「中国人」にすぎず、(ほんとうの)「中国人」ではない。だから、「(ほんとうの)『中国人』は一体どのようなものかわからせてやる」と言うのである。いささか強引で、自惚れに近い発想だが、これが二人の関係の始まりとなる。

このことからすでに解るように、この作品は、馬威の『愛』がメアリーの『中国人に対する偏見』を消し去れるのが作品のひとつのテーマである。

つまり、作者はこの作品で、人種偏見を植えつけられている英国人の庶民たちが、英国という社会の中で、個人のレベルで中国人と接触、交流することによって、相手を一人の人間として理解し、それに基づいて更に相手の国のことも正しく理解できるか、ということを作品で考えているのではないか。

したがって、この作品では、中国人の馬威と英国人のメアリーとの『愛』の形が中心になる。だがその一方で、彼らの形からは現れ出て来ない側面をも描き出すため、いささか図式的とも思われる対照的な『愛』の形が用意している。それがウエンドル婦人と老馬との『愛』である。前者が片思い、後者が相思相愛に近い。

まずウエンドル婦人と老馬のケースを見る。

ウエンドル婦人も、実際に中国へも行ったことのないごく普通の英国人である。従って、彼女は新聞、小説、映画等の影響を受け、馬親子の為に部屋を借りに来たエバンズ牧師に、「私が二人の中国人に私の家で鼠を煮て食べるなんてことさせられますか?」^(註18)とか「彼らはアヘンを吸いませんか?」^(註19)と矢継ぎ早に尋ねる。

このようなウエンドル婦人であるから、金が無いばかりに中国人の世話をしなければならぬ、この悲惨な運命を恨み嘆くことになる。

「メアリー! わたしもう十分生きたわ! こんな生活、もうまっぴらごめんだわ! お金! お金! お金! 何でもお金! あんたの父さんも

お金のために命を縮めたわ! わたしもお金のために仕事に行き、辛酸をなめた! そして今、お金のために二人の中国人に仕える! そのため友達にはバカにされる!」^(註20)

ところが、ウエンドル婦人は、馬親子と生活するうちしだいに馬親子のことを理解し始める。次の文章は、公園で馬威に親切にされる出来事があり、その一件も終わり、馬威の家に帰りましょうの言葉に対する答えであるが、ウエンドル婦人の心情を象徴的に表している。

「一緒に帰りましょう!」ウエンドル婦人は言って、なんども心の中で思った、「誰かが好んで私を冷嘲しようと、誰が笑いのものにしようと構わないわ! 意地でも中国人と一緒に歩くわ!」と^(註21)。

だが、中国人と一緒に生活し、中国人に肩入れをすると、友達も彼女に近づかなくなるという事態も生じて来る。

ウエンドル婦人はドリーおばさんにクリスマスに招待したが、何の返事もなかった。クリスマスの朝になって一通の短い手紙とプレゼントを受け取った。手紙には、中国人と一緒にいれば生命は安全ではない、クリスマスは快楽を享受する日であり、あたかも自ら好んで恐怖や危険を招くようなことはすべきではない、とあった。ウエンドル婦人は手紙を読み終わって、いささか不愉快になり、小さい唇を高く突き出した。でもドリーおばさんを責めることはできない。普通の人ならだれしも“中国人”と“惨殺”は一つに結びつけて言うのだから^(註22)。

『愛』は確かに階級、国籍、人種に関わりないばかりか、それをも越えたところで生じる。しかも、その感情の発生は誰も阻止することはできない。そこには何人も関与できない自由さがある。しかし、殊に人種が違えば、その感情の発生時の自由さとは裏腹に、その実際の結婚、その後の生活には予想以上の障害がある。

老馬にも問題がある。実際に結婚すればどこで生活するか。中国か、それとも英国か。

帰国は必ず果たす。でも彼女を連れてか? よしんば彼女が行ったとしても、どのように彼女を遇したら良いものだろうか? 大金持ちだったらやり方もあろう。上海に大きな家を買って、総て英国にいたときと同じにするのだ。だが私は裕福ではない。彼女について来させても、社会風習も違い、娯

案も無い、言葉も通じず、食事も我慢できないだろう。残酷すぎる！ 彼女が行ったら死なねばならない。彼女を連れて帰国できないなら、私がズートこの地において、兄貴の魂と一緒に埋もれるか？ だめ！ だめ！ だめ！ 帰国しなければならぬ、ここで死ぬわけにはいかん！ 方法はないのか！ 本当に！（#23）

文化も生活環境もまるで違う中国に、もしウエンドル婦人を連れて行っても、彼女は中国の普通一般の庶民と同じような生活はすることはできないだろう。だが中国で英国風の生活をさせるには金がいる。

だが逆に、例え老馬が、総てに平等のように見える英国に残るとしてもやはり問題は残る。ウエンドル婦人は老馬に次のように語る。

「社会！ 社会！ 社会がもっぱら愛情を殺すのです！ 私たち英国人は政治上では平等です。でも社交上では階級があります。私たちの婚姻の自由は、同じ階級に制限されてます。……(略)……私とあなたの間には階級の壁はありません。でも、民族の違いが私たちの障害になっています。民族は階級よりもっと困難です。考えました、じつくりと。やはり冒険はしない方が良いでしょう！……(略)……まして娘のことを考えると、とても一緒にはなれません。娘を好きになった人が現れたとき、娘の義理の父が中国人だと聞けば、絶対に娘をもらわないでしょう。人種偏見を撃ち破る方法はありません。あなたが初めていらした時、私も何かの妖怪だと思っていました。みんなが言っていたのです、あなたがたを悪人だと。今では、あなたが決してそんな悪い人物でないかと解っています。でも社会の人は知らないのです。私たちは結婚したあとも社会で生きて行かねばなりません。社会の偏見はわずか三日で私たちを殺すでしょう。……(略)……東方の女性は家の宝であり、外の人には見せないし、外国人に嫁ぐなぞとても許さないと聞いています。英国人も同じです。外国人が自分達の民族の女性に手を着けるのを最も嫌います。……(略)……あなたとわたしは永久に良き友達でいることは許されています。ただ良き友達でいることができるだけです（#24）。

社会の階級的違いを越えたり、国と国の間に横たわる人種偏見に打ち勝ったりして結婚に到達する。これは理想的ではある。だがそれは

物語の世界では成立するが、現実には容易に達成できることではない。むしろ、普通の平凡な幸福を得ようと思えば、このような冒険はやらない方が良く結論づけている。

この結論からすれば、人種の偏見という障害から結婚する道は閉ざされているように見える。だが、この作品は、作者が英国人の婦人であるウエンドル婦人に、人種偏見を踏み越えて結婚できない挫折の原因、理由を語らせることで、逆に最もありそうな形で、人種偏見を越えた例を示していると解釈できるのではない。

まず、ウエンドル婦人がそこら辺りに居る普通のおばさんである設定からすれば、日常的に中国人に付き合えば、必ずウエンドル婦人の認識、理解までは到達することができると言えよう。確かに彼女自身は人種偏見の壁を越えて結婚することはしなかった、だが彼女は既に中国人とは人種偏見を越えて、素晴らしい友人になることができるようになっている。

結婚だけが愛の成就とすれば、愛は挫折したことになる。だが最終的に選んだ「好朋友（良き友達）」という道にしても、苦しみ模索して得たものであれば、愛の一つの結実と考えられるのではない。

このことも、馬威とメアリーの場合を見ながら更に考える。

四

馬威とメアリーの場合はどうか。

馬威が一方的にメアリーを好きになったことは既に述べた。だが、メアリーの方には熱愛している男性がいる。その男性はワシントンと言います、この作品中では、彼の名前だけが登場する。

一旦馬威の心に燃え上がった『愛』の炎は誰にもどうにもできるものではない。この作品では、彼の心の中で理性と欲望の戦いが連綿と繰り返される。メアリーは中国人を嫌っているのだから自分を好きになるはずがないと、自らに

言い聞かせても、彼女を諦めることができない。彼女には恋人がいるのだと言い聞かせても、やはり無駄である。馬威の『愛』はそのようなもので消え去るものではない。

ではメアリーが彼と婚約したらどうなるか。

馬威はメアリーを思う心情を姉と慕うキャサリンに相談する。キャサリンは言う。

「彼女はもう外の人のものになったんでしょ、だのにまだ彼女を思って何になるの？ 馬威！」^(E25)

尊敬するキャサリンの答えである。馬威は断念せざるを得ないのか。だが、これに対し、馬威は、「まさにこの点が容易に解決できないんです」^(E26)とつぶやく。実は、この言葉は、次の一つの展開の伏線である。つまり、この作品には、後に、婚約とか結婚の枠を越えた「愛」の形が、いや形式的な「愛」を越えた男女関係が登場して来る。実は、その体现者は、常識的な発言をしたはずのキャサリンであるが、馬威の『愛』もそれに近い処に至る。

次の文章にそれが見れる。この場面は、事実上の、馬威とメアリーの『愛』の総括となる。

「知ってるさ。君たち英国人が中国人を馬鹿にしているってね。君らは、中国人って言えばゴート、暗殺、毒薬、強姦と一緒に思い浮かべてきた。でも、僕らは、ここで顔を突き合わせて生活し始めて、もう一年になる。なのに、まだ僕を理解してくれないのかい。僕は君たちが想像していたのと同じかい。君たちの中国人に関する知識が、謠言で出来てる新聞や、下賤な小説から得ていることは、とくに解っている。まさかそんな話を信じているんじゃないだろう。もう君がワシントンと婚約しているのは知っている。僕はただ、君が良い友人になってくれれば、それでいいんだよ。ただ、僕が愛してるってことを知っててくれればいいんだ。愛情は必ずしも肉体的接触によって表現する必要はない。もし君が僕の愛の心をよく理解し、僕を良い友人にしてくれるなら、僕は一生涯、永遠に幸せなんだ。たしかにワシントンが羨ましい、でも君を愛してるのだから、敢えて彼にいささかの嫉妬心も起こすまい。僕は……」^(E27)

この後、メアリーは長く沈黙する。沈黙の後、この話題は、ついには、メアリーの「馬威、あなた近ごろ、ワシントンを見てない？」という

言葉で、幕切れになる。したがって、読者の最も知りたいことはメアリーの口から聞けない。

メアリーに愛する人がいてもなお彼女を愛し、彼女は自分が愛していることを理解してくれればそれでいい。それで満足なんだ。しかも、自分は、彼女が自分を理解してくれれば愛する人にも嫉妬しない。馬威はこのように述べている。ここに至って、馬威の『愛』と称すものの実体の変容している。この『愛』に嫉妬はなく、この『愛』の彼方に結婚というゴールはない。しかも、肉体的接触を越えて存在し、外見上は「好朋友（良い友達）」である。したがって、そこには人種偏見の壁も生じ得ない。

つまり、この場面は、馬威がメアリーにこのような『愛』をちゃんと理解し、受け入れるように迫っているのである。だが、それは棚上げされたままで打ち切られる。

結局、メアリーはワシントンと結婚はできない。意外にもワシントンはメアリーではなくキャサリンと一緒に生活し始めることになるのだが、実は、ワシントンがどうしてキャサリンと生活することになったかの説明に、前述の棚上げされた問題を解く鍵があるのではないのか。

ワシントンはメアリーとキャサリンを比較して、キャサリンと一緒に住む決心をした。彼は依然としてメアリーを愛し、忘れてはいなかった。だが、彼とキャサリンとの関係は『愛』の上に存在するようなものであった。この『愛』以上のものは第一次世界大戦以後に発見されたものであり、まだどういうものか知ってる人はいなかった。これは形式に制限されることなく、極めて自由で、極めて潑刺としたものである。メアリーは理解するはずはなかったし、享受するはずもなかった。というのも、彼女の『愛』の定義には婚姻、夫婦、家庭の枠が設けられていた。『愛』以上のものは決してそれらの古い風習で縛ることはできないものだった^(E28)。

メアリーはワシントンが何故キャサリンを選んだのかが理解できない。つまり、メアリーは『愛』を婚姻、夫婦、家庭という公式で捉え、必ずしもこれにこだわらない処で『愛』の結実を求めるキャサリンとワシントンを理解できない

のと同様、馬威を理解できないのではないか。理解できなければ、回答の仕様がなない。

ところが、皮肉なことに、メアリーの母であるウエンデル婦人は恐らく馬威の『愛』を理解できる。ウエンデル婦人と老馬との『愛』の形と、メアリーと馬威の場合は極めて対照的に描かれているが、実は、ウエンデル婦人も馬威の到達した処と同じ処に到達している。ウエンデル婦人も中国人を好きにならねば受けることはなかったであろう屈辱を受け、考え抜いて到達した処が「好朋友」であった。

このことから考えるに、「好朋友」は、人種偏見を克服して、実際の結婚という枠をも越えた一つの愛の結実であると考えても良からう。しかも、この領域だけは、いつの時代にも、誰にも、何ものにも犯すことはできない。

一方、メアリーは「中国人に対する偏見」で明らかにされたように新聞、雑誌、小説、映画をよく見て色濃く影響を受けており、最新の流行ファッションに敏感で、モダンに時代の最先端を歩いているように見えた。だが、愛とか結婚とかの考え方を通して、その実、マスコミや流行に疎いウエンデル婦人よりも反って頭が固く、保守的であることが暴露されている^(註29)。情報に素早く反応し信じ込んだり、流行を夢中で追い掛けることは、それを安易且つ無批判に受け入れるという点で、古い考えを信じ切り離さないのと同じである。

ともあれ、馬威らと一年間、交流してきてメアリーの中国人観が変わったのか、そうでないのか、最後までメアリーの口からは聞くことはない。これはあくまで読者の想像に任されている。一方、馬威はロンドンを離れるに当たって、メアリーとの関係については「愛の心を受け取らなかった」^(註30)と述べる。

だが、同時に馬威はロンドンを去る時に、メアリーに「指輪」を残している。これは一見矛盾しているように見えるが、馬威はメアリーの愛を受け取れなかったけれど、去るに当たっても尚メアリーに対する愛は変わってはいない

し、これからも変わらないことを示したのではないか。つまり、これは、メアリーがどのような人物であり、彼女にどのように遇されようとも、ひたすら愛することで、いつかメアリーを変えることができる、という可能性を信じることになろう。こうして、この態度こそがやがて、偏見の壁を破る、唯一かつ最良の方法だということを示していると解釈するのは、読み過ぎであろうか。

おわりに

この作品が、前作品『趙子日』と最も違うのは、前作品が構成の中心に「是」と「非」のようなものを置いていたのだが、この作品にはそれはない。前作品を、勸善懲惡的なやや伝統的な構成法を持つと考えれば、老舎はここに来て、ひとつ脱皮をしたと言うこともできよう^(註31)。また、この作品に取り入れた『愛』の形も、この作品に初めて見えるものである。

この小論で、あくまで老舎の「ユーモア」の方法に拘り、『二馬』のテーマの一つである「人種偏見」を中心に老舎の試みや彼の本質のようなものを考えてみた。彼はこの問題も結局人間の問題として考えている。送られて来る「○○に関する」情報を鵜呑みにし、知らずに「○○に対する偏見」に染まる可能性は誰にもある。人間のこの弱点から「偏見」の問題を掘り起こす。問題そのものには複雑さはない。ただ人間の弱点が問題を複雑にしているだけだ。奇妙な面である。これを見抜き描き出すのが老舎である。

もちろん、この作品にもいささか傷はある。主張が先行する余り、やや図式的過ぎ、親子関係に幾らか矛盾が生じているのではないか。

ともあれ、老舎は『二馬』を脱稿した後、1929年6月末にロンドンを発ち、三ヶ月間ヨーロッパを遊歴する。その後、途中シンガポールに立ち寄る。シンガポールには半年ほど滞在し、そこを1930年2月末に離れ、帰国する。『二馬』以後、彼の作品がどのような展開見せるのか、さ

らに考えてみたい。(完)

注

テキストは『老舎文集1』を使用した。引用文にページを示したが、これはこのテキストのものである。

- (1) 連載開始の前の号、即ち『小説月報』第20巻第4号(1929・4)の「最后一頁」で、編者は『二馬』の掲載を予告し、続いて『二馬』に書かれるのは、父子二人がロンドンに遊ぶ故事である。中国の父親と息子、更にこれに英国の母親と娘が配置され、更に東方人を誤解する英国社会が布置されている。我々は老舎君がいかに巧妙にこのような錯綜した材料を処理しているかを思い知らされる。筆調の活発さたるや神がかっている。『老張の哲学』や『趙子曰』に比べると明らかに進歩がある。人物も完全に色合を変えている。その中に異国情緒が満載されており、ロンドンに行ったことのある人は、彼の書くロンドンやロンドンの人を見て、絶賛するだろう。彼の書き方はこのように真に迫っている。我々東方人の古国の親子二人の、この世界の大都市で体験する様々な絵模様は、我々を笑わせ泣かせる。だが、作者は譴責もせず擁護もしない、ただ、彼は真摯な態度で、出来事を叙述するだけである。多くの『留東外史』『留西外史』(本の名ではなく海外体験談のようなものを指すのであろう……筆者)の中にあって、『二馬』は決してこの類いではない。我々が保証する。」と述べている。
- また、連載を終わるに当たっては、『小説月報』第20巻第12号(1929・12)で、その反響を「(1)『滅亡』巴金著。(2)『二馬』老舎著。この二冊の長編小説は今年の文壇で多くの読者の注意を引き、極めて広範にわたる批評家の好感を得た。彼らは将来更に高い評価を受ける機会があるだろう」と述べている。
- (2) 拙論「老舎『趙子曰』試論」、八戸工業大学紀要第9巻、1990、p.187-196.
- (3) 同(2)p.197.
- (4) 「我怎麼『老張の哲学』」。『老舎研究資料』より訳出した。これはもともと雑誌「宇宙風」創刊号(1935・9・16)に掲載され、後に創作体験集『老牛破車』(1937)に入れられ、また最近出された『老舎研究資料』(1985)にも収録されている。
- (5) 「談幽默」。『老舎研究資料』より訳出した。もと

もと「宇宙風」第23期(1936・8・16)に発表したもの。以後の経緯は(4)に同じ。

- (6) 『老張の哲学』については、拙論「老舎『老張の哲学』私論」「集刊東洋学」57号(1987・5)を参照。
「趙子曰」については、(2)を参照。
- (7) 第二段・1、p.408~p.409.
- (8) 第二段・6、p.433.
- (9) 同(8)
- (10) 第三段・1、p.470.
- (11) この場面について言及したものに、中野美代子氏の「老舎——“幽默から正經”への道」(『近代中国の思想と文学』1967年、大安所収)や高橋由利子氏の「老舎の文学とキリスト教(2)——『趙子曰』と『二馬』——」(上智大学「外国語学部紀要」第19号)がある。
- (12) 第四段・7、p.592.
- (13) 同(11)
- (14) 「娼婦」は原文では「妓女」であり、文脈から判断して「娼婦」と訳した。
- (15) 第二段・12、p.463.
- (16) 第四段・7、p.588.
- (17) 第二段・7、p.436.
- (18) 第二段・1、p.412.
- (19) 同(17)
- (20) 第三段・9、p.512.
- (21) 第三段・10、p.518.
- (22) 第四段・4、p.566.
- (23) 第四段・5、p.577.
- (24) 第四段・11、p.617~p.618.
- (25) 第四段・6、p.587.
- (26) 同(24)
- (27) 第四段・8、p.600.
- (28) 第五段・1、p.622.
- (29) 高橋氏は(11)の論文でメアリーのような人物たちを『覚醒しない新世代』と称し、その注に「一見新しいものを標榜してるようでいながら、その実、旧世代よりももっと保守的である人物を指す。『二馬』では、最新流行のファッションを追求しながら、中国人に対する偏見ではその母親よりももっと保守的なメアリー……(略)……がそれにあたる」(p.245)と述べる。概ね妥当であるが、ただメアリーは「中国人に対する偏見では」「保守的」だ一括するが、「保守的」という印象が強くて来るのは、寧ろ「結婚」に対する考え方からで、「偏見」からはそう簡単には言えないように思う。
- (30) 第六段・6、p.645.
- (31) (6)を参照。